

「なに悩む新4回生」

京の大学生1000人に聞く



北青少年活動センター チーフユースワーカー 宮川知子

大学の新4回生は、最終学年を迎えました。以前は、単位をほぼ取得、あとは、卒業論文だけの大学生らしい青春を満喫する時期でしたが、近頃は、就職難で、早い時期から就職活動を始めています。

京都市ユースサービス協会は、京都市内の立命館大学、龍谷大学、京都産業大学、大谷大学の4大学の新4回生(男女各50人)を対象にアンケートを行い、現在の悩みや将来に対する思いを聞きました。

アンケートの対象は2014年1月現在の3回生で、定期的にも最大の悩みや不安は就職についてでした。別表のように、6つの質問に答えてもらいました。トータルで多い順に並べましたが、男女の違いも出ました。「将来の職業」については、教職員などの人と関わる仕事が多い学生5人、女子学生16人と分かれました。「就職活動で優先すること」で、男女とも「仕事の内容」が第1位。「職場の人間関係」や「自分を生かせる」については、男女差がありました。

内閣府の「第8回世界青年意識調査」(2007年)によると、「職業選択の重視点」でも、日本の青少年は「仕事内容」がトップで「職場の雰囲気」は3位、「自分を生かすこと」は5位と京の学生アンケートとほぼ合致しています。

した。日本以外の4か国(韓国、アメリカ、イギリス、フランス)では、「収入」を重視した答えが多かったようです。「今一番気になっていること」では、「就職活動中、今まで見えなかった世界の動きが気になる」「景気の悪さや就職難についても肌で感じる」「平和な社会を望む」といった一方で、自分の進学や将来について悩んでいる大学生の声が多くみられました。

自由記述の中では、「就職活動の情報以外に、地域活性化のため学生への支援や安心して暮らせるまちづくりに貢献したい」といった声もありました。

また、「大学は学問を修める所で就職予備校ではない」と、就職活動で多くの時間や労力が割かれてしまうことの疑問や憤りなどをぶつけ

てくる学生もいました。就職活動の早期開始の要望や「学費が高いためにアルバイトなどに時間を取られ、学問に専念する時間が少ない」という意見も書かれました。しかし、「行政や企業、大学、地域社会に望みたいこと」について、特に、政治に対する意見は、ほとんどみられませんでした。

現在、京都市内7青少年活動センターで実施しているさまざまな体験やボランティア活動、地域活動についても、大学生が就職活動などで忙しいため、長期的な参加ができない、という



学生が多くなっている傾向にあり、継続的に取り組みづらくなる傾向にあります。
私たちとしても、「学生時代にいろいろな経験ができたので、今の自分がある」「これからの社会や政治について考え、自分なりに取り組みたい」と言える青少年が増えるよう、青少年の声を生かした事業やコーディネートを実践し、出合いや気づきの機会を提供していきたいと考えています。

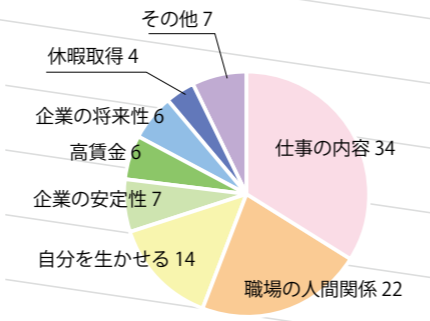
アンケート 「京都の大学新4回生 100人に聞きました」

あなたは将来どんな仕事をしたいですか

教職員など人とかかわる	21(男5、女16)
金融・商社 商品営業	11(男6、女5)
社会貢献度の高い仕事	8(男4、女4)
学芸員	4(男4)
事務・経理	4(女4)
公務員	3(男3)
福祉系	3(女3)
スーパープログラマー	2(男2)

就活で最優先する条件は何ですか

仕事の内容	34(男17、女17)
職場の人間関係	22(男14、女8)
自分を生かせる	14(男3、女11)
企業の安定性	7(男5、女2)
高賃金	6(男6)
企業の将来性	6(男2、女4)
休暇取得	4(女4)



今一番悩んでいること

就職のこと	68(男30、女38)
生活費の心配	10(男6、女4)
勉強・進学のこと	8(男5、女3)
生きがい	3(男3)
自分の健康	2(男2)
恋愛・結婚	2(男2)

いま、最も気になること

就職問題	22(男9、女13)
将来のこと	6(女6)
進学	4(女4)
政治の行方	3(男3)

どんな雇用形態を望みますか

正規職員	88(男44、女44)
契約職員	1(女1)
パート・アルバイト	1(男1)

行政や企業、大学、地域社会に望むこと

働きやすい職場環境	10(男5、女5)
大学の授業料を下げて	4(男4)
安心して暮らせる環境	3(男2、女1)
中小企業の説明会不足	2(男2)
経済の復興	2(男2)
福祉系職場の待遇改善	1(女1)
採用時の面接重視を	1(女1)
育児休暇の取れる職場	1(女1)

社会に飛び込む 勇気を

京都産業大学ボランティアセンター
ボランティアコーディネーター

井上 泰夫

窓口に来る学生が語る「就活への不安」は、実は、正体の分からない「社会への不安」そのものではないか、と感じるようになりました。学生たちの社会へのイメージは非常に限定的です。その場合、就活と同時にいきなり現実と直面することになってしまいます。そのため、就活までに社会と関わり合う機会をつくっておくことが重要だと考えています。大学には、インターシップやボランティアなど、地域社会と密接につながる機会があります。そうした仕組みを活用し、社会に飛び込む勇気を持ってほしいと願っています。



生活の安定が一番 2学生にミニ・インタビュー

アンケートに関連して若者の生の声を聞くために、立命館大学産業社会学部の新4回生、橋本千夏さんと太田稔君にインタビューをしました。

―就職活動はどうしてる？

橋本 化粧品や食品業界を目指して就活中。母が栄養士で、自分がアレルギー持ちだったりで興味があります。親の生活を見て、こういう生活したいとか生活水準は落とさたくないとか、また、親の忠告も選ぶ基準になっています。

太田 僕は、大学院進学を考えています。最終的には実家の七宝焼きの会社を継ぐつもり。歴史の深い京都に来て家業を大事にしたいという思いが強くなりました。

―非正規という選択肢は？

橋本 正社員というのは大きい。生活がかかってくるので…。授業でその違いを学んで怖くなりました。もちろん、正社員じゃない可能性もあるし、流れに身を任せています。今の世の中、そういう感覚じゃないと生きていけないのかなと感じています。

―結婚についてはどんなイメージ？

太田 「勢い」かな。早めに身を固めてから仕事に専念したい。結婚相手にも仕事に対する理解が欲しい。いつかは結婚して子供が出来て安定した生活を求めたいという気持ちはあります。でも、結婚で自分のペースを乱したくない。やりたいことをやり続けたいし。親からは「してね」と言われるけど、今の時世を考えると、無理という感覚と一人でも生きていけるという感覚がある。結婚は選択肢の一つかな。

―今の日本をどう思う？ 政治とかに関心ある？

太田 無いです。どうこうして変わるもんでもないですし。投票にも意図的に行かないようにしています。選挙に行く時間があったくない。

―今一番の悩みは？

橋本 とりあえず一年後、生活できていたらいいかな。恋愛・結婚を含めて、精神的に安定したい。「金銭的な余裕」「精神的な余裕」ではないと感じている。

太田 橋本 恋愛・結婚を含めて、精神的に安定したい。「金銭的な余裕」「精神的な余裕」ではないと感じている。



(聞き手 下京青少年活動センター ユースワーカー 岩見 晃宏)

若者の悩みとサバイバル戦略

立命館大学産業社会学部准教授 斎藤真緒

「ゆとり教育」を受けてきたいまの若者たちは、「さとり世代」と呼ばれている（原田曜平『さとり世代―盗んだバイクで走り出さない若者たち』角川ONEテーマ21、2013年）。堅実で高望みしない、恋愛に淡泊などの特徴が指摘されているが、たしかに、今

回の調査でも、「さとり世代」ならではの断片が垣間見える。新しいことにチャレンジするよりも、これまで作り上げてきた家族や友人との関係を重んじる傾向にあり、結婚と仕事の両立を「欲張り」と感じるなど：

めるべきなのだろうか。単に、若者の気持ちに「寄り添う」だけでは問題は解決しない。まずは、大人自身が作り出してきた教育・職場・生活環境、ひいては政治に向き合い、再点検し、よりよいものにしていくために動き出すことから始まるのではないだろうか。それが、若者に「寄り添う」ための重要な前提条件であると考える。そうした取り組みなしに、若者の社会・政治不信を払拭することは決してできないだろう。

しかし、今日の若者が、どの世代よりも現在の生活に対する満足感が高いことを、そのままた、現状に対する無条件の肯定として理解してしまうのは、あまりにも安直であろう。アンケート結果では就職活動を中心とする将来への強い不安が示されている。学業が疎かになってしまっている矛盾への不満。どんな仕事をしたらいいか、じっくり悩む時間すらも十分に与えられていない。

この原稿を執筆している現在は、ソチ・オリンピックの真只中である。10代を中心とする若者の活躍には目を見張るものがある。彼らには、一昔前の選手のような「使命感」はあまり感じられない。オリンピックという独特の緊張感を、自分たちが一番楽しんでいる。彼らなのすがすがし

い姿は本当にまぶしいばかりである。こうした柔軟な適応力は、自分の生き方を切りひらく重要な潜在力となりうるだろう。

満足感と隣り合わせにある将来に対する「底なしの不安」を、大人はどのように受け止

そのそも「さとり世代」とは、頓挫した「ゆとり教育」の負の遺産の責任を若者へと押しつける大人の側の勝手な「責任逃れ」の言葉でしかない。大人の無責任な振る舞いを直感的に見透かしながら、自分の生き方を堅実に模索している姿は、若者なりの、上の世代への怨嗟を通り越した、新しいサバイバル戦略なのではないだろうか。



写真協力 大谷大学

